

This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

II. 19

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

カナダ土人の起源は、大昔シベリヤとアラスカ
が地続きであつた頃モロゴリヤ人種が氷原を
渉つて来たのであらうと推測する学者も居る
が、容体骨格が似て居る以外何等の証拠と
るものはない。太平洋岸オカスギナ河川に
住む五^{現在}人々、自分達の先祖は日本から漂着し
たものだと信じ、日本人漁者に兄弟分の好意
を示す者もあり、彼等の日常語に日本語に似
たものが沢山あると或る漢者は語つたが、こ

れも想像の

うた

をいふ

と

カナダには、十州全体に亘つて原住民が居
て、異つた言葉をゆつていた。標準語とい
うものは無い。併し、^{ハドソンバークスパーソン湖}の北に住むク
リー族のために宣教師として土人教化に一
身を献けていた。牧師はクリー語を
活字にし聖書をクリー語にした。カナダの
土人語が記録されたのは、これが唯一であらう
インディヤンとは、クリストフワ、その南
パスが一八四四年にアメリカ大陸に到

時、彼は探検航海の目的地、マルコ・ボロ
 の^金の西、東洋の赤道に到着したと思つて、
 原住民をイレデヤと呼んだ。それから
 とイレデヤと呼称するようになつた。従
 英王では東洋の系の人と、アメリカ人を区
 別する爲めに、アメリカ人をレッド
 デヤと呼んだ。

オレタリオ内だけで数種族居る、同じ
 言葉を使つてゐるものがある。

(一) クリー族、ハドソ湾から、五大湖~~湖~~中

のスピーリオ湖に到る一帯に住み、アルブ
 ヌキ語を使つてゐる、遊獵の民である。

(二) オジブワ族、スピーリオ湖の西、ミシヤ

ヌ、ペリーの東岸一帯に住み狩獵を渡世に

てゐる。

(三) ヒューロ族、トバコ族、ニユートラ

族など、イリ湖の北で農業を渡世とし

てゐる。

(四) イロコイ族、オレタリオ湖、イリ湖の南

一帯のニユーロ族に住む。

狩猟しつゝ流転するクリー族やオジブラ族

は水牛の皮かバーク木の皮
あどで

テツツのあ家を作り住む

レツドマツアイコイ族

別名長屋族ともいわれ

長屋の中は三家族

五家族、中には

二十から二十五ヶ族

が一つ長屋に住んでおる

西壁に沿うて家族の寢床を作る

家は木の柱に横木を結びそれにシーター、エルム、スプルース又はアシの皮を張る

夏は虫を防ぐために壁に沿うて棚を造り寝る

煙突のあつた地面に薪をつんで焚火するのを煙

か室内に籠り、自然眼病が多いし、老人には

盲眼が多い

冬は焚火の周りに蓆を敷いて寝る

この長屋族は男は狩りをして、女は農耕をする

る、穀物は木の皮で造った樽桶に入れた蓄える

、鼠が跳擧するのを新井に竿をつるし衣類を

あつさける。

村落、この種の大長屋が、二十から三十ヶ集合

した村落があるが、火の用心のために決して
 接触して建ててはいない。
 要塞にユイロツ族は、イロツ族の~~敵~~敵を
 懼れて、部落の~~間~~間に~~壁~~壁を造る。そして出入は
 一ヶ所からするようになっておる。それゆゑ
 という時は塞がらうにしてある。
 この砦の内側には、棚を作つて、それに梯
 子をかけて、敵襲の時には、男はその棚の上
 から、おろかり敵に、石を投げつけ、弓で射
 る。

ユイロツ族が一ヶ所に十人、五人も住む
 と、自然作物も出来ぬ、薪の運搬も
 遠くあるから、他の所らしい場所を探して移
 動する。彼等は一年三、四ヶ月は漢、嶺に
 出掛け、
 彼等は天性、~~な~~で道を作る、面影を避けて、出
 来ただけ水路に~~沿~~沿つて何処までも往復する。
 たまに山中に小徑が出来てゐるのは、鹿やム
 ズが通う道が自然、彼等の道にあつたもので
 川を渡りにして、由決して橋をかけ、事をし

東いで、斫木を汲りか、徒歩を汲りか、大
 川たつたらカヌーを汲る。彼等は雪が降ると
 雪靴を作つてはく、又トボガと呼ぶ機を作
 つて荷物運搬に使う。

彼等はバーチ木の皮で巧妙にキヤヌーを造
 る。シダー木の根を巧者に使つて、
 造る。ニユーヨークのバーチ木はふさくて
 キヤヌーに出来あひので、バスウード、バ
 ナツツ、パイロなどの節あしの大木をくつて
 キヤヌーを造る。キヤヌーを造る道具は圖の



如きものを使う。

彼等の使つた石器、ハマー、皮こぎの
 鎗、矢尖やとうもろこしを粉にする石臼等
 の遺物がある。

銅を祭見、五大湖の中の最大のスーペリヤ
 湖のミチピコーン島の岩から純粹の銅を或
 る土人が見付け、それをたたき伸ばして、十
 イフにしたり、矢尖にしたり、飾りにして使
 いた

農作Ⅱ部落の近くの開墾し易い所の雑木を伐り、焼きすて。大貝殻を木の柄に縛り付け、シヤブルにして土をおこし、そこに種を下す。穀物や野菜を作る。穀物は収穫してバコ木皮で造った椀様の容器に蓄藏して冬の食糧にする。かぼちややれおどは土の中に埋め、貯藏した。

とうもろこしは石臼で碎き、水に浸して、生のまま食う場合が多かった。時にはとうもろこし粉を水で二ね、焼石の上に並べ、焼き

まんじゅうのようには料理することがあった。

オシブワ族は、農耕をする代りに、湖水の水ぎわに~~出~~来る野生の米を集め、又、^{米の穂}を^{しご}み^{込み}、一回に二石^{ぐらい}取って帰る。

棚の上に廣げて、下に火をたきよく乾かして、おみを打ち落して蓄貯する。

南オレタリオの土人は、冬の食料に野生の胡類を集める。そして野生の^{摘み}胡類を集めて、天日で乾かし、貯蔵する。

砂糖採集Ⅱ 砂糖楓の汁を集めて、土壺で煮

つめたり。氷臭下の夜、戸外で楓の汁を氷らせ、凍った水を捨て砂糖分を食用にする。土人は漢、腕によつて大部分の生活を支えておるのである。湖や川に産卵期に鮭川に群をあして上つてくる鮭を一人はバシ皮を燃やしてキヤヌーをあやつり、一人は鎗で鮭を捕える。冬は氷の下に網を張つて白鮭、マスあどを捕える。藁は草木の繊維を次で作つたもので、骨や木で作つた釣針で餌をさして釣ることもある。鮭は乾したり、燻製にしたり

して貯える。湯を作るには、火を焚いて石を焼く、バスケット（水の中よりぬように編んだ籠）に水を入れ、その中に焼石を入れて湯を作る。フリース族やヒューロ族は、飾りを好み、顔に色彩の入れ墨をする風習があつた。子女の教育、土人の子供達は、昔は学校はなかったが、父や兄や年長者から教えられる。子猫が沢山あつた。弓を射る事、鎗の使用、野獣の罠をかけた。狩猟の道具を作つたり

成長すれば狩りに出掛ける。漁釣りに大人
に連れられて行く、娘達は弟妹の守りや世話
をする。お母さんから、植物や岩石から取つ
た色で染め方を教えてもらったり、魚や獣肉
を乾すことや、獣皮をふめしたり、衣類を作
ったり、粘土や銅で作るもの、蓆や籠を編む
もの、木や根や皮で作るものを教えられる。
土人は遠く運動競技をやる。ラクロスは土人
の祭りにあそびである、角力、競争、射的
屋内では、彼等の作つたあそびをして遊ぶ。

子供達は、老人から昔譚を何時までも聞か
ず聴き入る。大鼓に合わせて踊ることは好
む。お目出度い時は踊りまくる。
宗教は大概の土人は皆、偉大なる霊が天上に
又は太陽に宿っていると信じている。その霊
の姿をアシブツやクリー族はマニト（神）
と呼んでいる。南方の種族はアレクシ太陽
や雷は、神様だと信じている。それは人智理
解出来ない能力を表はすからである。土人は
お祈りをしたり、供物を捧げたりする。